

# 日本植生史学会の会員動向将来予測のためのアンケート結果報告

## Results of a questionnaire for the future prospect of the number of members in the Japanese Association of Historical Botany

### 調査の概要

#### 1. 調査目的

日本植生史学会の会員数は毎年減少の傾向にあり、ここ5年間で52名・2団体の会員が減少している。減少した一般会員62名のうち、36%にあたる22名はシニア会員に区分変更しており、シニア会員は今後も年間数名のペースで増加が見込まれる。学生会員は20～27名の間で推移しており、減少傾向はみられないものの、一般会員に移行することなく退会に至るケースも多い。2020年度には、シニア会員の数が学生会員の数を上回ることとなった。

また、学会の財政面においては、余剰金を毎年減らしながら運営しているのが現状であり、会員数が減少していくなかでそうした運営のあり方を続けていくことは危惧される。

近年のこうした現状を踏まえ、会員動向の将来予測のため、会員アンケートを行うこととした。学会の財政健全化にむけて会員から意見を募り、今後の学会運営に役立てていくことを目的としている。

学会年度	名誉会員	賛助会員	一般会員	学生会員	シニア会員	団体会員	合計
2016	3	1	325	23	3	6	361
2017	3	1	309	20	4	6	343
2018	3	1	280	23	14	5	326
2019	3	1	270	27	21	4	326
2020	3	1	261	23	25	4	317

会員数の推移 (2016年度～2020年度)

#### 2. 調査項目 (1～4: 選択式, 5～8: 記述式)

- あなたの年齢層をお答えください。
- 現在の会員種別をお答えください。
- 勤務先の定年までの年数をお答えください。
- 定年後の日本植生史学会との関わりについて現在の見通しをお答えください。
- 学会財政の健全化にむけて、学会で取り組むべき課題についてお書きください。
- 今後、「日本植生史学会談話会」として開催を希望するテーマがありましたらぜひお書きください。
- 今後、「大会シンポジウム」のテーマとして取り上げたい内容がございましたらぜひお書きください。
- 日本植生史学会に対するご要望・ご意見等がございましたらご自由にお書きください。

#### 3. 調査対象

2020年5月時点のすべての会員(名誉会員3名, 賛助会員1社, 一般会員267名, シニア会員25名, 学生会員25名, 団体会員4団体)320名, 4団体

#### 4. 調査期間

2020年5月20日(水)～6月30日(火)

#### 5. 調査方法

ニュースレターとメーリングリストでアンケートへの協力を呼びかけてGoogle Formへのアクセスを案内し、会員各自が入力したデータを集計した。

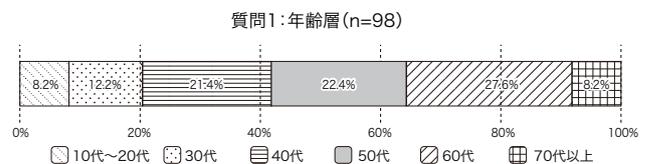
#### 6. 回収率

団体会員からの回答はなく、個人の会員320名のうち98名の会員から回答があった(回答率: 30.6%)。

### 調査結果

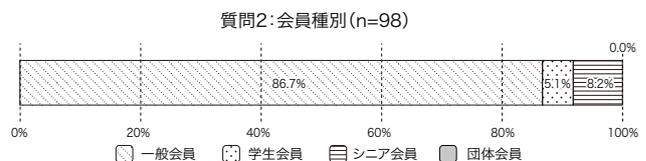
質問1: あなたの年齢層をお答えください。(回答数: 98)

幅広い世代から回答が寄せられたうち、60代が27.6%と最も多く、50代が22.4%, 40代が21.4%と続いた。10代・20代と70代以上がどちらも同じ8.2%であった。



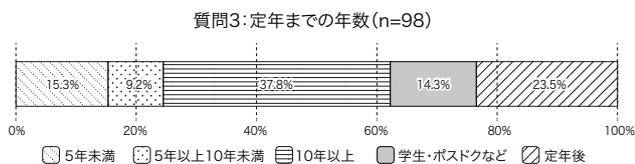
質問2: 現在の会員種別をお答えください。(回答数: 98)

一般会員が86.7%と大半を占め、シニア会員(8.2%), 学生会員(5.1%)が続いた。団体会員からの回答はなかった。回答率を会員種別ごとにみると、一般会員とシニア会員はともに32.0%, 学生会員は半分の16.1%であった。



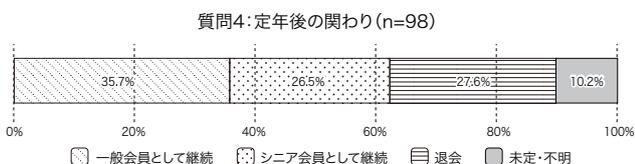
質問3：勤務先の定年までの年数をお答えください。(回答数：98)

5年未満が15.3%，5年以上10年未満が9.2%を占めており，今回回答したうち4分の1の会員が今後10年以内に定年を迎えることとなる。一般会員のみについてその割合をみると，85名中24名(28.2%)とさらに高い割合の会員が10年以内に定年となる。



質問4：定年後の日本植生史学会との関わりについて現在の見通しをお答えください。(回答数：98)

一般会員として継続予定(35.7%)が最も多く，シニア会員として継続予定(26.5%)と退会予定(27.6%)がほぼ拮抗する結果となった。



質問5：学会財政の健全化にむけて，学会で取り組むべき課題についてご意見があればご自由にお書きください。(例)「学生会員の増加に向けての活動が必要」，「会誌の電子媒体化が必要」など。(回答数：38)

学会財政の健全化にむけての課題について	年齢層	会員種別
学部・前期博士課程の学生会員が植生史の研究にかかわる所に残ってくれるような活動があればいいと思います。(進学率の上昇など)	10～20代	学生
会誌の電子媒体化をしていただきたいです。もし紙で必要になれば自分で印刷できるので。	10～20代	学生
学生会員の増加に向けての活動が必要だと思います。	10～20代	学生
学会の活動内容に関して，特に考古学関係者の認知度がまだ低いと思われるため，考古学関係者へ周知し，会員数増加を目指す方策が必要。	30代	一般
電子媒体化やオンラインで完結する仕組みをお願いします。	30代	一般
学会誌をきちんと定期的に発行して欲しい。	30代	一般
クレジットカードや銀行口座からの自動引き落としができるとう未払いが減るし手間も減るので，可能であれば実現してほしい。会誌の電子媒体化は早急に。	30代	一般
学会誌の年1回発行を検討。	30代	一般

分野の偏りをなくす。	30代	一般
有料で一般向け企画や，科研などを取得して中高生向けイベント開催。	30代	一般
学会として書籍(シリーズ本)を定期的に刊行すべき。植生史研究の現在がわかる教科書的存在を目指し，会員・非会員を問わず，様々な分野の大家，気鋭の若手に執筆を依頼する。会誌だけで存在感を示すのはもう限界である。	30代	一般
学生会員増加のために，非会員学生の参加費を下げる。	40代	一般
会誌の冊子体での発行を廃止し，電子ジャーナルに切り替えるべき。	40代	一般
会費の値上げ，経費削減が必要である。	40代	一般
多くの参加者を見込める学際的コンテンツの充実化。	40代	一般
会誌の最新号についても早々の電子化を進めることや，学生会員の助成制度のさらなる拡充を行うなど，若い世代に魅力的に思える活動が必要。	40代	一般
会費は増やさず，財政状況に合わせて会員向けサービスを見直すべき。	40代	一般
会員の増加に向けての活動が必要，学会大会への参加しやすい雰囲気醸成。	40代	一般
考えた事が無いです。	40代	一般
植生史研究の充実と質の向上。	40代	一般
会誌の電子媒体化や発行頻度を少なくするなど，学会会員数や財政に合わせた提供サービスの縮小が必要かと思う。学生会員が多少増加しても，アカデミックポストが縮小していく中では一般会員の増加へは中々つながらないと思う。	40代	一般
遠回りかもしれないが，多様な研究フィールドの中で植生史の重要性や面白さを伝えられる工夫が必要か。古植物学との連携強化?	50代	一般
(ほぼ完全)電子ジャーナル化すれば経費を抑制できるのではないのでしょうか。	50代	一般
「若手会員の減少」が特に問題である。そのため学会自身が，若手会員の増加に向けての活動が極めて重要である。	50代	一般
種実や樹種の同定研修会等，学生を対象に，研究対象として選択眼で見ることができるようミニ研究会集を，各地で開催してはどうか?	50代	一般
学会誌の電子化，会費の値上げ。	50代	一般
関連類似学会との連携・合併・共同運営。	50代	一般
会誌の電子媒体化と公開(最新号は除くなどの措置はあってもよい)。	50代	一般
学生会員については，入会の利点と活用法を丁寧に説明する。	60代	一般
学生や30代，40代の会員の増加に向けての活動が必要だと思います。他の学会も若い会員が少なくなってきたように思います。	60代	一般
電子媒体化は避けては通れないと思います。ただし，本学会は文理の多様な方々が参加している関係上，実雑誌の果たす役割の比重は重いと感じます。できるかぎり紙媒体は残す方向でいくべきかと。	60代	一般
基礎的(初歩的)な現地踏査，演習の開催。	60代	一般
植生史に関わる研究者の育成を推進し，会員の増加を図ることが必要。	60代	一般
学会を維持することを目標とせず，これまでのように限定会員で動かすのではなく，活動で魅力的で，異分野の研究者の流動的な共同研究が切り替わりながら見込まれるかたちにする。	60代	一般

会誌の電子媒体化が急務、会員数の増加は必ずしも期待しない	60代	一般
小さな学会を維持していくのはとても大変だと思います。シニア会員料金と一般の両方から選べるようにしておくといいと思います。会員の年齢構成をよく考えたほうがいいと思います。若い人からシニアまでどのような構成になっているのか？検討しておかないと3000円シニア会員ばかりが増えて学会を維持するのが難しくなります。オンライン会議などの導入も今後は必要になるでしょう。経費削減につながります。	70代以上	一般
会誌の電子媒体化が必要	70代以上	一般
特に問題ありとは思っておりません。	70代以上	シニア

質問6：今後、「日本植生史学会談話会」として開催を希望するテーマがありましたらぜひお書きください。(回答数：16)

談話会のテーマ案	年齢層	会員種別
SNSなどでシェアできる内容(普及活動を積極的にしたい)。	30代	一般
なし。	30代	一般
近い分野の学会(植生学会、第四紀学会、文化財科学会、生態学会など)と共同開催して、新しい視野・人脈を得るべきではないか。固定メンバーで似たようなテーマの談話会や大会をいくら開いても、刺激の少ない同窓会で終わってしまう。学生ばかりか若手の足も遠のく。	30代	一般
特になし。	40代	一般
実験室での各種実習。	40代	一般
特になし。	40代	一般
大会開催地に併せて、鳥しょ部等、普段立ち入ることの少ない地域で巡検があればいい。	40代	一般
特になし。	40代	一般
考古学と植生史等、複数分野に関わるテーマ。	50代	一般
水月湖年縞堆積物の各種分析成果の最新情報。	50代	一般
植生史の時間軸について人類歴史と自然史についての関連性を解りやすく。	60代	一般
植生巡検。	60代	一般
初期のように「植物と人間」の関係を地球生態系の変容を踏まえ地理学や地球科学の研究も踏まえた学会にする必要があるが、第四紀学会も同様で繋がり方をコーディネートする役割を担う研究者を、多数の分野から選出して活動する執行部を組織すること。	60代	一般
植生史研究の裏技公開、植生史研究のここが面白い!	60代	一般
草本植物の栽培と利用の変遷。	70代以上	一般
「山野草」の保全について。薬剤の空中散布の生命への影響について。	70代以上	シニア

質問7：今後、「大会シンポジウム」のテーマとして取り上げて欲しい内容がございましたらぜひお書きください。(回答数：23)

「大会シンポジウム」のテーマ案	年齢層	会員種別
穀物の利用開始時期に関する研究の課題(ある程度評価が定まってきたなかで、今後の関心はどういったところに向けられるのか知りたいです)。	10~20代	学生
弥生・古墳時代以降の比較的新しい時期に関する植物利用に関する内容。	30代	一般
生涯学習としての位置付けなど。	30代	一般
なし。	30代	一般
植生動態モデル等のモデルシミュレーション研究。	30代	一般
IntCal20と植生史。	30代	一般
特になし。	40代	一般
植生史と他分野との協働・連携による最新の研究展開など。	40代	一般
歴史時代の植生史。	40代	一般
特になし。	40代	一般
発表者の主体が若手(大学院生・ポスドク)となるシンポジウムを企画してほしい。	40代	一般
年輪年代学関連(最近の進展、応用例、問題点・課題等)。	50代	一般
もっと学生や一般が興味を持つ分野、例えば古生物や人類学などとコラボしたテーマ。	50代	一般
学生が集まりやすい、研究テーマに関わるものを取りあげてはどうか。	50代	一般
ありません。	50代	一般
植物と人の共生史、クロボク土の形成と植物との関係など。	60代	一般
日本列島の地形形成の特質と植物誌・人類誌のそれぞれの分野から離れた研究者でなく、それぞれの分野の基礎知識・基礎研究法を有する研究者による手続きを踏んだシンポジウムの企画。	60代	一般
時代の画期と植生、ヒトが植生史に与えた功罪。	60代	一般
「植物遺体・化石群のタフオノミー」 木材・種実・葉・花粉など植物遺体・化石群は、植物群の固有の性質、さまざまな自然の営力だけでなく、人為によっても変成され、実在した植生の復原を困難にしている。この困難を克服する方策が多様化している。	60代	シニア
「縄文時代から現在まで、人為生態系の形成」 たとえば日本列島では、自然景観が見られるところは稀有であって、ほとんどが文化景観であるといえる。にもかかわらず、文化景観の形成に関する歴史研究は単純で乏しい。とりわけ古代・中世・近世・近代においては時代ごとに激しい文化景観形成が繰り返された。		
「巨大災害と生態系・人間社会の変動」 植生史研究の発展的かつ重要課題の探索。 など、いくつも古くて新しいテーマはたくさんある。		
特にありません。	70代以上	シニア
植物の新しい分類と化石種の分類について	70代以上	一般
作物栽培の変遷(品種、栽培法など)。	70代以上	一般
草本植物の栽培と利用の変遷。	70代以上	一般

質問8：日本植生史学会に対するご要望・ご意見等がござ

いましたらご自由にお書きください。(回答数：24)

日本植生史学会に対するご要望・ご意見	年齢層	会員種別
特にありません。	30代	一般
会誌が少ないわりに学会費が高い。	30代	一般
博士課程に進学する学生が激減している時代であり、学生会員の減少は、どの学会でも大きな課題となっている ( <a href="https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/15/1/15_137/_pdf-char/ja">https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/15/1/15_137/_pdf-char/ja</a> )。学生が就職しても参加したくなるような学会を目指さなければ、10年後には衰亡の危機にあるだろう。公開シンポジウムでは、アカデミアでしか役に立たないマニアックな情報ではなく、その日のうちに家族に話したくなるような情報を提供できるような演者を選ぶべき。	30代	一般
大会で、一般公開の談話会があってもいい。地域の子どもたちも参加できよう企画がほしい。草花の同定方法を教えるとか、標本作りとか。発表件数が少ないなら、そちらに時間を割いてもいいんでは。	30代	一般
大会、イベント等東日本での開催もしていただきたい。	30代	一般
J-stage で植生史研究も検索できるようにしていただきたい。	40代	一般
特になし。	40代	一般
特になし。	40代	一般
意見交換の貴重な場として、会の存続を願っています。	40代	一般
特に無いです。	40代	一般
会員として継続するメリットが見えにくい。	40代	一般
本学会に限ったことでなく、我が国の自然科学の分野全般の学会で起こっている現象は「会員の高齢化」と「若手会員の減少」である。このことは、我が国自身が「超高齢・少子化」が急速に進んでいることから、どの学界でも避けることのできない必至の問題である。特に若手の新入会員が増えない状況は、近年、学術・研究の状況が大きく変化し、インターネットなどを利用すれば、学会に所属しなくても多くの学術情報を入手できるようになってきたこと、研究を生業としているプロフェッショナルの研究者の評価として、どれだけ有名な国際誌に論文を掲載したか（インパクト・ファクターなど）が重要視されるようになってきたことなどもあり、研究者や研究者を目指す若手の学生が論文を投稿する学会誌としての魅力が減ってきたことなどがある。まず、本学会の研究テーマに関するアピールを様々な方法で行う必要がある。例えば地方博物館を使った巡回展、簡単な普及書や解説書の制作と販売、学生会員の所属大学での普及講演会と交流会など、若手に絞った勧誘ができないかと思う。また、現在の会員は博物館等に所属する方が多いことから、植生史をやっている学芸員等と学生会員の所属大学の研究室をうまく橋渡しし、研究費の一部を出すなどして、学芸員が指導できるような環境づくりとPRができないか。など思う。	50代	一般

外部からの研究者招聘活動の強化。	50代	一般
学会はどことも同じような課題を抱えていると思いますが、若手会員や新規入会者をどう確保してゆくのかが、またそのための魅力あるコンテンツ作り・・・でしょうか。役員の皆様方のご苦勞を顧みず、言うだけで申し訳ありません。	50代	一般
旧石器学会、第四紀学会など、関連諸学会との連携。	50代	一般
ありません。	50代	一般
個別学会との共催活動を行ってみることも一案。参画している研究者の基盤となる活動とどう繋がっているのかを確認しあうことが必要で、孤立しては、未来はない。	60代	一般
会員としての活動ができないまま高齢者になってしまいました。一般会員として継続をさせて頂ければ有り難いです。	60代	一般
小さい学会ながらよくやっているとと思う。	60代	一般
いま植生史研究は、狭義の植生史にとどまらず、環境史、景観史、地・生物・人間系を一体的に捉える景観環境史といった捉え方が求められるようになってきている。「植生史」という名称の変更を考えてもいいように思われる。	60代	シニア
真摯な研究に心を砕いていることに敬意。	70代以上	シニア
特になし。	70代以上	一般
2019年大会に久しぶりに参加しました。活発であり、巡検も素晴らしいかと、ありがたく思っています。	70代以上	一般
種生物学会などと合同のシンポジウムの開催など農学系研究者の参加。	70代以上	一般

### まとめ

アンケートの集計を分析したところ、今後、何も対策をしないとすると、会員数および会費収入は激減すると予想されました。この結果を受けまして、今後の会員数維持のための方策や、支出の削減、予算の獲得について、幹事会を中心に早急に検討して参りたいと存じます。また今後の学会運営について、会員の皆様から頂戴いたしましたご意見についても、幹事会を中心に検討し、具体的な行動計画の策定を進めてまいりたいと存じます。